



南山大学人類学博物館 MUSEUM notes

- ・タイ山地民の衣服②—アカ族—
- ・バヌアツ共和国アンブリム島北部の位階象徴像

VOL.2 2020.10

アカ族既婚女性用 帽子



タイに暮らす山地民の衣服紹介第二弾として、「アカ族」の女性の衣服をご紹介します。これらの資料も、VOL.1で紹介した上智大学西北タイ歴史・文化調査団が収集した資料です。

アカ族は、チベット、ミャンマー北部に起源を持ち、タイ国内には一九三〇年代前後に移住してきました。現在もミャンマーや中国には多くのアカ族系グループが暮らしています。中国ではハニ族というグループに含まれます。タイに暮らすアカ族は標高一二〇〇m以上の高地に村を作っています。気候は、暑い日には四〇℃を越し、寒い時期の朝晩は五℃以下に冷え込むなど、時期によってかなり温度差があります(カノニ一九九一)。



アカ族の女性の衣服は、帽子、上衣、スカート、前垂れ、脚絆、シヨルダバグが基本スタイルです。

人々にとって、銀は装身具である以上に、その家の財力を示すものでもありません。装身具に使用される銀は、インドルピーや中国の硬貨、仏領インドシナ統治時代の通貨などが使用されています。銀貨をそのまま縫い付けたり、銀細工師に依頼したり

して、ボタンや首輪などに改鑄してもらいます。

上衣の袖や背中、脚絆には草木を染料とした赤色、黄色、黄緑色の布が縞状に縫い付けられています。袖の補強や、足を保護する役割を担っています。

祭礼時には銀製の首輪、腕輪、指輪、耳飾り、貝や銀貨で装飾されたベルトなどで一層着飾ります。アカ族の

アカ族女性衣服

上衣 スカート 前垂れ 脚絆 シヨルダバグ

また、アカ族のスカートは丈が非常に短いです。アカ族の女性は、この短いスカートを腰の低い位置、太ももの付け根あたりで履きます。かがんだ時にスカートの中が見えないように前垂れを身に付けます。前垂れにも縞状の布やビーズ、銀貨などが装飾されています。上衣やスカート、脚絆は藍染の木綿素材で作られています。農閑期に自らの手で木綿や藍を栽培し、糸を紡ぎ、布を織って染め、刺繍やアップリケを施す作業はすべて女性の仕事です。

【帽子】

アカ族の帽子は装飾が非常に多いのが特徴です。写真右側の女性が被っている帽子が既婚女性用のものです。竹の芯を上へ上へと塔のように盛り上げ、表面には銀のボタン、銀貨や数珠玉の実や穀類の種子のビーズを縫い付け、てっぺんからは猿の毛や鶏の羽毛を紅色に染め上げた房飾りや色とりどりの毛糸のポンポンなどを垂らします。髪型は、前髪を真ん中で分けてカラフルなピン留めで固定し、後ろの長い髪の毛を高い位置で縛り、帽子の土台にしてい

ます。日中の日差しが強い時には、銀の部分がかなり高温になってしまったため、木綿で作られた頭巾を被りま

未婚女性用の帽子は、既婚女性のものとは比べると装飾がおとなしく感じられませんが、一面に銀のボタンやビーズがびっしりと縫い付けられています。

アカ族の女性は、頭髪を他人に見せることを嫌っており、寝るときも、働くときも常に被ったまま生活していました。

【今日の民族衣装】

普段着として常に華美な民族衣装を身にまとっているアカ族ですが、現在ではTシャツを着ることも当たり前になり、帽子を被らない女性も増えてきました。儀礼や冠婚葬祭などといった特別な装いへと変わっていききました。

【山地民大集合！】

右の写真は、調査団が撮影した一九七一年十二月五日に開かれたタイ国のニコム国王の誕生日を祝う祭典の様子です。この祭典では、ユーミエン、モン、アカ、リス族などが集い、プラカードをもって広場に入場、踊りや歌を披露し、種族対抗の綱引き大会や会食が行われました。

(南山大学人類学博物館

学芸員 井原 瑠梨)

【参考文献】カノミタカコ

1982『タイの山より愛をこめて』

1991『神話の人々 タイ山岳民族の染織工芸』

2002『アジア少数民族服飾図鑑』

原野農芸博物館



左:未婚女性、右:既婚女性
1970年代撮影



アカ族

ユーミエン族

モン族

リス族



南山大学人類学博物館にはバヌアツ共和国の位階象徴像が六点、展示・収蔵されています。これらは二〇〇九年に当館に寄贈された今泉コレクシヨン(東ビスマルク諸島、ソロモン諸島以東の島嶼部の資料計百六十八点)の一部で、民族造形品の輸入販売を行っていた「パシフィック・アーツ」が、専門業者とみられるトッド・バーリン(Todd Barlin)から一九八九年一月に入手した資料です(今泉コレクシヨンの受け入れや資料の内訳については南山大学人類学博物館紀要第

二九号に詳しい)。

バヌアツ共和国は南太平洋の南北約一二〇〇kmにわたって連なる比較的大きな島十三と七十以上の小さな島から成る国です。西側にオーストラリア、東側にフィジーがあります。ほとんどの島は起伏が激しく、豊かな森林で覆われています。これらの島の約半分は火山島、残りの約半分はサンゴ礁からなっていて、人が生活しているのはそのうちの十二島です。アンブルム島はバヌアツ共和国で五番目に大きな島で、世界でも数少ない溶岩湖を見ることができ火山島です。

バヌアツ共和国の位置する地域は一七七四年、ジェームズ・クックによってニューヘブリディーズと命名されました。その後、この地域においてイギリスとフランスによる衝突が繰り返され、一九〇六年にイギリスとフ

ランスの共同統治領となりました(一九八〇年七月三〇日にバヌアツ共和国として独立)。

バヌアツ共和国の島々は文化的な特徴を共有する一方で、それぞれが独自の文化的要素を持っています。共同統治の影響はバヌアツ共和国の島々の伝統的な芸術にはほとんど及ばず、資料からはその文化的な特徴を見出すことができます。

当館の位階象徴像を見てみましょう。高さは一番低いもので一六〇cm、一番高いもので二六〇cmあります。収集地であるアンブルム

島北部には十三段階の「Magae」と称する位階があり、一定の階層になるとそれを誇示するためにこのような記念物を建造することが許されました。人々は高い階層や名声を獲得するために対価(ブタ)を支払い、高い階層へ昇格する儀礼の

【参考文献】後藤明ほか

2011「鶴ヶ島市寄贈・今泉ニューギニア美術コレクションについて」『南山大学人類学博物館紀要第29号』:57-65

鶴ヶ島市教育委員会

2005『オセアニア美術にみる「知流」を超えるもの』

National Gallery of Australia 2013 Kastom:Art of Vanuatu:75

ANNANDALE GALLERIES <http://www.annandalegalleries.com.au/exhibition-list.php?exhibitionID=145>(最終アクセス 2020/10/26)

ためにこれらの像を作成しました。大きな丸い目は、アンブリム島の文化芸術の特徴的な部分です。低い階層では人物は目だけで表現され、高い階層になるにつれて全身が表現されるようになります。



これらの位階象徴像は階層を示すという伝統的な目的のために、何世代にもわたって作られ続けてきました。形は時代とともに微妙に変化していますが、像の作成者は祖先や精霊に関する深い知識を持つ必要があります。木生シダには、茎の根元

が細く、先端に向かって太くなるという特徴があります。細い根元を支えるために茎から多量の不定根が出て、何層にも折り重なって太くなっています。また、葉は茎に螺旋状に密に着くものの、下方から枯れて茎の表面には葉跡が残ります。像に近づいてみると、ごわごわとした根が密にもつれ合っていて、それを彫って作っていることが分かります。また、根本付近でも葉が落ちた跡がまるで水玉模様のように残っているのが確認できます。

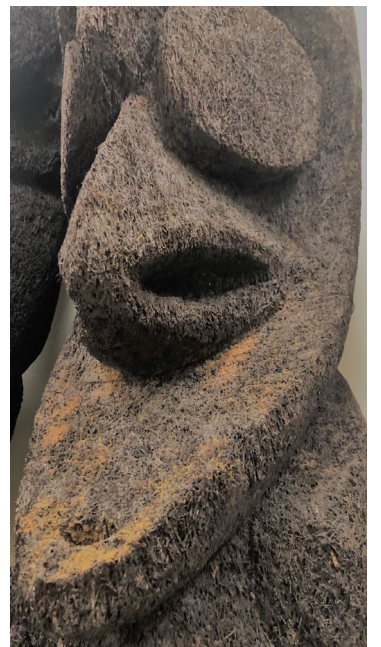


階層によっては黄土色に彩色したり、丁寧に文様やサメ、トカゲのモチーフを描いたりしたようです。そのような彩色は風化しても塗り直されることは滅多にありませんでした。当館の資料にも、黄土色の彩色が一部残っています。

階級取得の儀礼の際に位階象徴像は飾られ、階級取得者が勝利の舞を踊り、等級の称号または名前を獲得します。そして、所有者が更上の階級に昇格すると位階象徴像の機能的寿命は終了します。そういったものの一部は美術市場に出回り、オーストラリアなどの美術館や博物館に収蔵されたようです。当館の位階象徴像も同様の経緯を経ているとみられます。

(南山大学人類学博物館

学芸員 秦 優莉香)



南山大学人類学博物館
「museum notes」VOL.2

二〇二〇年十月発行

編集・発行 / 南山大学人類学博物館